

麥切

冷麪

〔言繼卿記〕天文十三年六月六日癸酉、烏丸加州知行分代官事淨一房ニ可申談候間可同道之由被同道之由被申候間八時分令同道罷向切麪にて一盞了、

〔料理物語後段〕麥きりは大麥の粉也、うちやうはきり麥のごとくうちて、みじかくきりて汁うほをきはそばきりのごとくしてよし、

〔易林本節用集食服比六〕
〔書言字考節用集服食〕
〔大上膳御名之事〕女房ことば

一ひやむぎつめたいぞろ。

〔尺素往来〕浴後者雖不珍平飯涼麵之間可隨御好也、

〔臥雲日件錄〕長祿二年四月十八日東岳和尚來留之薦冷麵因傳灯錄有引水之語五燈會元改引爲麵太平廣記麵部有引水語則不必作麵乎云々、

〔祇園會御見物御成記〕一大永二年祇園會爲御見物御成之時從上平御一獻ニ付而次第、

建立

一式三獻參○中

二獻 ひや麥 御そべ物なまとり

〔親俊日記〕天文十一年六月廿六日乙巳細川殿小的あそばされニ貴殿へ御出也大夫殿射手衆廿人被召其之先湯漬まいる的終冷麥まいる、

〔用捨箱下〕温飪の看版
〔中略〕
〔辛川○〕

又按るに一代男二の卷に前に摸したる畫を載たる條二川といふ所に旅寐して云々ありて、芋川といふ里に若松昔の馴染ありて人の住あらしたる筐蓋をつゝり所の名物ひら温飪を手馴

平鹽